

多摩川流域の地形と居住

—— 神社の立地を例として ——

1980年

内田和子

都立福生高等学校教諭

多摩川流域の神社立地を考える

目 次	
I 西多摩地区を例として	1
1. はじめに	1
2. 研究の方法	1
3. 西多摩地区の地形概観	2
4. 研究の結果と考察	2
II 多摩川流域における神社の立地する地形	4
III 今後の問題点	6

I 西多摩地区を例として

1 はじめに

いにしへの昔より、日本人は大自然の中に多くの神々を見出し、人々が集落をもとにした社会生活を営むようになってから、その土地に集落共同の祖神を祀るようになった。神を祀る神聖な地である神社の立地する場所は、どのようにして決定されたのであろうか。これには、民俗的・神道的、あるいは歴史的等さまざまな理由が考えられ、簡単に片づけられる問題ではない。しかし、立地する場所を地形的に明らかにし、それがどのような地形条件にあるのかを考察することは可能である。また、神社の立地を地形的な立場から論じた研究は筆者の調べたかぎりでは見あたらなかった。

本研究は、神社の立地と地形との関係を明らかにするためのファースト・ステップとして、東京西部の西多摩地区を例に、神社の立地する地形単位について類型、考察するものである。さらに、この結果から多摩川流域における最適な居住環境としての地形はどのようなものかを捜る手がかりを得たいと考えている。なお、本研究でいう西多摩地区とは、かつて及び現在の西多摩郡に含まれる範囲、すなわち現在の奥多摩町、青梅市・羽村町・端穂町・福生市・秋川市・五日市町・日の出町・原村の3市6町村の地域を示している。行政区画による地域区分はかならずしもすぐれているとは言いがたく、むしろ地形を考える場合には、大きな（主要な）地形界、すなわち流域界のようなものによる地域区分の方がふさわしいと思われる。そのような意味で、将来この研究を発展させまとめる際は、地形を主として考えた地域区分をとり入れたいと考えるが、今回はまず、取り扱いやすく、一般的（ポピュラー）な小地域ということで行政区画による小区分によった。

2 研究の方法

まず、「東京都神社庁・神社・職員名簿」を基礎として、本研究地域の神社名と所在地をリストアップした。この名簿に収録されてないものについては、電話帳や市販の市町村地図より補足した。リストアップした神社の所在地を2万5千分の1地形図上に図示した。この「2万5千分の1神社位置図」と、筆者

が作成した「2万5千分の1多摩川流域地形分類図」とを対照して、それぞれの神社の立地する地形単位を決定した。筆者が53年度に作成した、「2万5千分の1多摩川流域地形分類図」は、多摩川本川流域を対象としたものであり、最上流部分を欠いているものなので、2万分の1空中写真の判読と現地調査によって支川流域と最上流部をつけ加えた。

3 西多摩地区の地形概観

東京都の最西部にあたる奥多摩地方は、関東山地の一部をなし、秩父古生層と中生層からなる壮年期の山地である。この山地は、多摩川とその支流である秋川・日原川などによって開折されている。とくに東西にのびる多摩川は、この地域を南北に分断している。北部の主稜は雲取山(2018m)、南部の主稜は御前山(1405m)で、山地は東部に向かってじょじょに低くなって、東のはずれは高尾山(600m)と青梅を結ぶ高度400~500mの線となる。この関東山地の東麓に接して、山地より一段低い高度200~300mの丘陵がある。これらを北よりあげていくと、加治(阿須山)、狭山、草花、加住、多摩の丘陵で、本研究地域には加治、狭山、草花の丘陵が含まれる。これらの丘陵は、ほとんど新生代の第四紀層から構成される。五日市盆地には、第三紀の終りごろの中新生の地層が小規模にみられる。そして丘陵の周囲から東部には、広く台地が分布している。これらの台地は広い意味での武蔵野台地を構成するもので、本研究地域には、多摩面、下末吉面、武蔵野面、立川面の各段丘と、いわゆる後ローム段丘である何段かの段丘が見られる。後ローム段丘は、拝島段丘・青柳段丘・千ヶ瀬段丘等数種のものが見い出せるが、拝島段丘・青柳段丘以外は名称等もさまざまであるので、筆者の作成した地形分類図でも、それらをまとめて、低位段丘と称した。段丘や丘陵下には、多摩川本川・支川に沿って沖積平野がひらける。沖積平野は自然堤防・後背湿地・旧河道・河原・崖錐からなっている。崖錐とは丘陵に接し、丘陵の構成物質よりなる微高地という意味である。しかし、この沖積平野は、自然堤防と後背湿地の出現する福生付近より下流である。それより上流は、多摩川本・支川が丘陵・山地・台地を開折する幅の狭い谷底平野性の低地となる。

4 研究の結果と考察

研究地域の神社244が立地する地形単位を分類すると表-1のようになる。これらのうちでもっとも多いものは、山地から段丘への崖下にあるものと、段丘から段丘への崖上にあるものである。丘陵から段丘への崖上・崖下にあるものも、山地から段丘への崖上・崖下とほぼ同じパターンであるとみなせば、山地または丘陵からの崖上にあるもの34(14%)、崖下にあるもの40(16.4%)となる。その他にも、山地から谷底平野への崖上というようなものを含めて、地形界が崖をなし、その崖上にあるものは、合計126(51.6%)あり、崖下のもは54(22%)になるということである。その次に多いのが、山地や丘陵の頂上に立地するもの32(13.1%)である。山地の尾根に立地するもの18も、頂上に準じたものと考えれば、これらの合計は50(20.5%)となる。残りは段丘上のも11(4.5%)、自然堤防上のも2、谷底平野上のも1である。

図-2は、本研究地域における神社の位置と、その立地する地形を示したものである。図-3は、表-1の神社の立地する地形を図解したものである。

表-1

№	地 形 単 位	数	%
1	山地頂上	20	(8.2)
2	丘陵頂上	12	(4.9)
3	山地尾根	18	(7.4)
4	山地～段丘崖上	28	(11.5)
5	山地～段丘崖下	34	(14.0)
6	山地～河谷崖上	21	(8.6)
7	山地～谷底平野崖上	7	(2.9)
8	山地～谷底平野崖下	2	(0.8)
9	山地～崖錐崖上	1	(0.4)
10	丘陵～段丘崖上	6	(2.4)
11	丘陵～段丘崖下	4	(1.6)
12	段丘～段丘崖上	34	(14.0)
13	段丘～段丘崖下	12	(4.9)
14	段丘～河谷崖上	17	(7.0)
15	段丘～沖積低地崖上	11	(4.5)
16	段丘～谷底平野崖上	1	(0.4)
17	段丘～谷底平野崖下	2	(0.8)
18	段丘	11	(4.5)
19	谷底平野	1	(0.4)
20	自然堤防	2	(0.8)

- ・ 本研究地域の神社は、地形界となる崖の上または下に位置するものが多い。崖上については、洪水の害を受けない、しかも目立つ場所であることの考察ができる。上流山間部では、川沿いに展開するわずかな平地に集落が営まれるため、集落の祖神は平地の直上の崖上に位置する例が多い。
崖下については、段丘礫層との関係からの湧水の存在とのかかわりが大きい。
- ・ 山地や丘陵の頂上は、もっとも目立つ場所であり、その地域のもっとも高い場所であるので神をあがめるのに好都合である。また、山そのものを神としてあがめる際にも頂上に社を築くことは最適である。この際、山頂部は崇高な場所ではあっても、人々の参拝という点では不便であるので、山麓に末社のような形で、山頂まで行かない人々の便をはかっている例が多い。これら山麓の末社は、ほとんど前述の崖上の類型に属す。本研究地域は多摩川の上流部にあたるので、頂上の立地の例が多い。
- ・ 自然堤防上に立地するものはきわめて少ないが、これは何度も述べているとおり、本研究地域が上流部で沖積平野が乏しいことにある。下流に向かうにしたがって沖積平野の面積も拡大し、自然堤防上の立地が増えるものと思われる。洪水の危険の大きい沖積平野では、自然堤防上の立地は被害を最少限にくいとめることができるので重要である。
- ・ 段丘上の立地は、どちらかというのと例外的である。すなわち水の得にくい段丘上に人々が居住するのは比較的新しい時代であり、この地に人々の集落の祖神として古くから祀られる神社もないし、独立したひとつの山のように、そのものずばりで神を感じさせる自然の地でもないからである。この地域で段丘上に立地する神社を調べてみたところ、江戸時代以降に開かれた新田集落の神社が多いことがわかった。しかし、新田集落の神社であっても、低平な段丘上に位置するより、上位の段丘との境界の崖上や崖下に位置しているものが多い。とくに新田集落とも、崖ともかかわらない特殊な例として、段丘上の古墳の南側に位置し、古墳との何らかの関係を思わせるものがあった。
(秋川市瀬戸岡)
- ・ 谷底平野の立地も例外的である。本研究地域内では、平井川の一小支谷の秋川市菅生にみられる。この地では集落も狭小な谷底平野内に見られ、神社を集落より一段高い地へあげてはいない。

Ⅱ 多摩川流域における神社の立地する地形

B地区では、武蔵野台地地帯を主な流域とするので、段丘上の立地がふえる。しかし、本来、段丘上の立地は水との関係、集落との関係で、神社の成立がきわめて古いことは考えられない。このような神社について、すべてを検討していないので結論をくたすえとは不可能であるが、おそらく、その多くは新田の開発にともなって、親村から分社したものであろう。

C地区は、支川の上・中流部をもつため、A地区と同様、頂上や丘陵に関した立地が多い。沖積低地が広がる下流部にあたるD地区では、沖積低地上の立地がふえる。この場合も、洪水の被害を最小限にくいとめる自然堤防上の立地がふえる。

流域全体を通じて、神社の立地する地形単位でもっとも多いのは、自然堤防上と段丘上である。自然堤

防上の立地は、中・下流にうつるにつれ、低地に人間の活動舞台がうつり、しかも、低地最大の災害である洪水を避ける努力がみられるためと解釈される。

段丘上の立地は、前述のような新田との関係も考えられるが、井の頭、三宝寺地等の例にみられる湧水との関係も考慮してみる必要があるかもしれない。いずれにしても、この点については、今後、おおいに検討の余地があろう。その他の地形単位については、A地区の場合と同様に、崖との関係、湧水との関係が多く認められる。

表-2 多摩川流域における神社の立地する地形単位

№	地形単位	A	B	C	D	計	%	
1	山地頂上	20		6		26	3.9	
2	丘陵頂上	12		18	4	34	5.1	Aは、旧西多摩地
3	山地尾根	18				18	2.7	区
4	山地～段丘崖上	28		11		39	5.9	Bは、旧北多摩地
5	山地～段丘崖下	34		5		39	5.9	区
6	山地～河合崖上	21		2		23	3.5	Cは、旧南多摩地
7	山地～谷底平野崖上	7		3		10	1.5	区
8	山地～谷底平野崖下	2		2		4	0.6	Dは、世田谷区、太
9	山地～崖錐崖上	1		1		2	0.3	田区、川崎市
10	丘陵～段丘崖上	6	1	23		30	4.5	
11	丘陵～段丘崖下	4	1	9		14	2.1	
12	段丘～段丘崖上	34	5	13	1	53	8.0	
13	段丘～段丘崖下	12	1	9	2	24	3.6	
14	段丘～河谷崖上	17		3		20	3.0	
15	段丘～沖積低地崖上	11	9	16	4	40	6.0	
16	段丘～谷底平野崖上	1	23	21	7	52	7.8	
17	段丘～谷底平野崖下	2			1	3	0.4	
18	段丘上	11	42	11	13	77	11.6	
19	谷底平野	1				1	0.2	
20	自然堤防	2	13	18	77	110	16.6	
21	丘陵～谷底平野崖上		3	26	4	33	5.0	
22	丘陵～沖積低地崖上		5	3		8	1.2	
23	丘陵～崖錐崖上			3		3	0.4	
24	崖錐～谷底平野崖上			1		1	0.2	
		244	103	204	113	664	100	

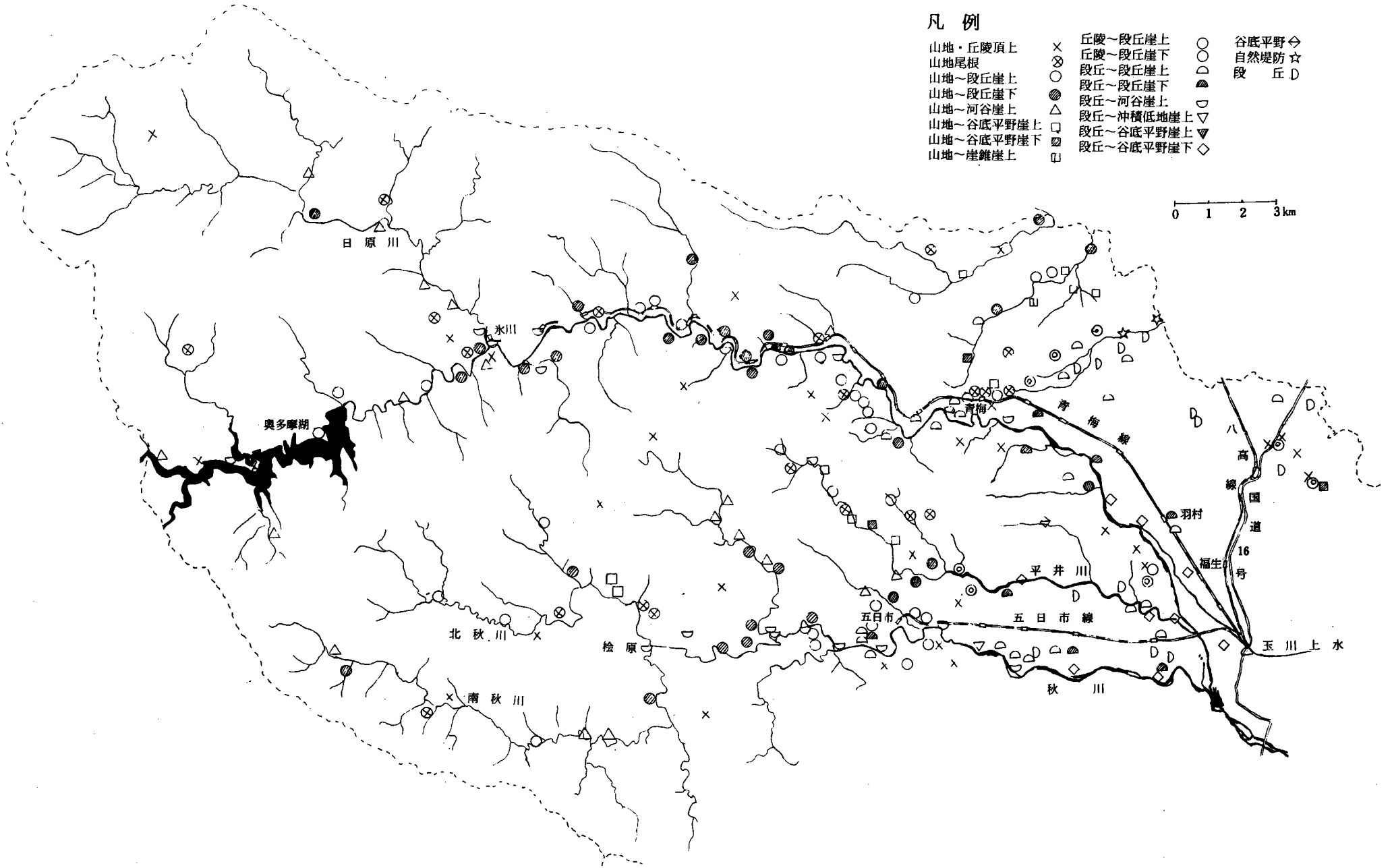
Ⅲ 今後の問題点

- ・ 移転や廃社、合祀等によって創建当時の位置が不明なものをどう扱うのか。
移転の経過や理由が判明した場合、どの位置をもってその神社の位置とするのか、あるいは、移転の回数ごとの位置をすべて、その神社の位置とするのか。また、創建時あるいは、移転の過程のある時期の地形の復原と、現在の地形との対比も大きな問題となろう。
- ・ 上流の山間部と地形単位が異なる下流平野部での神社立地がどのように展開していくのかを判明させ、山間部との比較が必要である。
- ・ 小論のはじめでも述べたとおり、本研究は地形をベースにしたものであるので地域を限って研究していく上でも地域区分のあり方が問題である。

(小論の作成にあたっては、本校教諭・栗原康光氏、事務長・土方育三氏、主事・中村益雄氏、野村利氏、関塚時三氏にご協力をいただいた。

また、昭和54年度「とうきゅう環境浄化財団・多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究助成金、課題名・多摩川流域の地形と居住」の一部を使用した。)

图-2



凡例

- | | | | | | |
|-----------|---|-----------|---|------|---|
| 山地・丘陵頂上 | × | 丘陵～段丘崖上 | ○ | 谷底平野 | △ |
| 山地尾根 | ⊗ | 丘陵～段丘崖下 | ○ | 自然堤防 | ☆ |
| 山地～段丘崖上 | ○ | 段丘～段丘崖上 | ◐ | 段丘 | D |
| 山地～段丘崖下 | ● | 段丘～段丘崖下 | ◑ | | |
| 山地～河谷崖上 | △ | 段丘～河谷崖上 | ◒ | | |
| 山地～谷底平野崖上 | □ | 段丘～沖積低地崖上 | ◓ | | |
| 山地～谷底平野崖下 | ◻ | 段丘～谷底平野崖上 | ◔ | | |
| 山地～崖麓崖上 | ◻ | 段丘～谷底平野崖下 | ◕ | | |

0 1 2 3 km

図-3 A (番号は表-1のもの)

